

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02309

研究課題名(和文)中国盛唐時期における「古典様式」成立後の仏教美術の展開 開元、天寶期を中心に

研究課題名(英文) A Study on the Development of Buddhist art after the establishment of "classical style" in the Tang Dynasty of China-Focusing on the Kaiyuan and Tianbao period

研究代表者

八木 春生 (HARUO, YAGI)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：90261792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、敦煌莫高窟、炳靈寺石窟、また山西、山東、河北地方の盛唐時期の紀年銘像を対象とし、その様相を概観した。如来像は、上半身の肉付きが良く量感があるAグループと上半身の厚みや起伏がほとんど見られないBグループの2種類が存在する。またこれらに対して、則天武后期及び中宗・睿宗時期の形式を継承する像も、僅かだが見られる。それをCグループとする。それゆえこの時期華北地方各地の造像形式には、統一性がないように思われる。しかし、華北地方の東部と西部で同様の形式が、ほぼ同時期に見られることは、仏教文化の中心となる場所があり、そこ、西安から発信される情報が各地にすぐに伝播する状況にあったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中国仏教美術が最高潮を迎えた盛唐時期(705～755)を対象とし、仏教造像は肉体表現を誇張するものと、単純化するもの、則天武后期の理想的なプロポーションを継承するものの3種類が存在したことを明らかにした。現在遺品が乏しいが、本来それらすべてが西安で作られ出したことを明らかにしたのは重要である。そして西安から伝播した情報を受け取ったそれぞれの地方では、自らの趣向に従い、それらの中から選択、受容されたことが知られた。さらに、これまで例外的な存在とされてきた、西安安国寺出土の水準の高い美しい身体表現を有する像は、則天武后期の造像様式、形式を継承したものであるとの評価、位置づけを行った。

研究成果の概要(英文)：This study targeted the Dunhuang Mogao Caves, the Bingling Temple Cave, and the chronograms of the Shanxi, Shandong, and Hebei regions during the Tang Dynasty. There are two types of Buddha statues: Group A, which has a well-fleshed upper body and a sense of volume, and Group B, which has almost no thickness or undulations in the upper body. On the other hand, there are a few images that inherit the styles of the late Wuzutian period and the Zhongzong / Ruizong period. Let it be Group C. Therefore, it seems that there is no uniformity in the image formation styles in various parts of North China during this period. However, the fact that similar forms can be seen in the eastern and western parts of North China at about the same time is that there is a central place in Buddhist culture, where information transmitted from Xi'an quickly spreads to various places.

研究分野：中国仏教美術史

キーワード：盛唐仏教美術 敦煌莫高窟 龍門石窟 炳靈寺石窟 天龍山石窟 河北仏教造像 山東仏教造像 四川 仏教造像

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

天授元年(690)に皇帝に即位した則天武后は、周を開国する。皇帝の位に就くため仏教を最大限に利用した則天武后は、唐朝建国以来の政策を変更し、「仏前道後」として仏教重視へと路線を大きく変更した。これにより、各地で仏教造像の数が飛躍的に増加する。光宅元年(684)以来、神都として事実上の首都機能を果たした洛陽では、その仏教文化の中心である龍門石窟における造像活動が隆盛を極めた。しかし研究の進展とともに、龍門石窟の影響力は強くなく、洛陽地区付近を除くと、他地方他地域ではそれと類似する仏教造像があまり見られないことが明らかとなってきた。これに対して西安地区およびその周囲には石窟がなく、また出土造像数が少ないものの宝慶寺塔石像龕像(703頃)に見られるように、造像の肉体表現が則天武后期にはかなりの水準に達していたことが知られる。それは天龍山石窟第4窟などの700年頃の造像に影響を与え、仏教美術は西安造像を中心とする新たな局面を迎えたと言える。だが、西安から離れた山東、山西、河南、そして甘肅地方などの多くの地域では、670年代から690年代にかけての時期、石窟造営がようやく増加し始めた。そしてそれらの造像中には、630年代後半から640年代初頭の西安造像との繋がりを指摘できるものが含まれる。龍門石窟を含め多くの地方、地域では、西安地方から影響を部分的に受容したが、積極的にその最先端の様式、形式すべてを模倣することはなく、個々の地方の独自性を強める方向に力点が置かれた。

このような状況にあって、中宗、睿宗教時期、710年頃に造営された天龍山石窟第6窟および第21窟の如来像の出現は画期的であった。それらの身体表現は肉の重みを感じられ、「実在性」を獲得したと言い得る点で、それ以前とは区別すべき像であると言える。また山東省済南長清県神宝寺出土の四面像中の如来像が、それらとほぼ同じ形式を備えていた。これほど肉体表現に関して共通認識を持つ造像が、山東地方と山西地方にほぼ同時期に彫り出されたと考えられるのは驚くべきことである。しかも類似する形式の像は、西安のみならず河北地方や山東地方、また敦煌莫高窟などに見つけられる。

報告者はこれまで、科学研究費基盤研究(c)「統一様式としての“初唐美術様式”の形成-地域性の喪失に注目して」(2010年度~2012年度)および同「中国仏教美術古典様式完成時期としての“則天武后期(655~705)”の確立」(2013年度~2015年度)において、唐仏教造像に見られる統一様式およびそれを具現するための形式の出現時期に注目した考察を進めてきた。結果、初唐時期は618年から705年までで、仏教造像の急激な発達認められたものの、統一的な造像様式、形式は未だ見られない則天武后期は、その中に含まれることを明らかにした。そして、各地で同様の造像が彫り出される、中国仏教美術史上もっとも高い水準の写実的な人体表現の像が出現したのは、則天武后期が終了した705年から710年代前半にかけてであったことが理解された。つまり、十分な権威があり仏教造像に相応しい表現であるとして、西安の流行形式が各地で受容された。このことで統一的な様式、形式が確立したと同時に、自然主義的な写実性が頂点に達し点で、中宗、睿宗時期(705~712年)を盛唐開始時期と位置づけることが可能となったのである。

彫像の場合これほどまでの写実性を備えた像の流行は、しかし長続きしなかった。720年代に入ると、それらとは異なるブロック状の上半身を持つ如来坐像が出現し、また肥満傾向を示す像や、身体と比べ膝張りが大きい如来坐像などが造り始められた。誇張された表現が流行すると同時に、また定型化を起こす地域も認められる。8世紀初頭に如来像の肉体表現についての共通の理解が進み、類似した様式、形式を備えた造像が各地で出現したものの、すぐにそれとは異なるいくつかの様式、形式に取って代わられた。「古典様式」と呼び得る様式およびそれを具現する

形式を備えた像の出現後、今度はそれを崩す方向に向かったと考えられる。だが8世紀半ばになると、西安安国寺出土の白玉像のような、さらに完成度の高い像が出現する。盛唐仏教美術の頂点は、まず8世紀初頭、則天武后退位直後に出現した。この時期を盛唐前期とするのであれば、8世紀の中頃に見られる、西安安国寺出土像に代表される造像が彫り出されたもうひとつの時期を盛唐後期とすることが可能であろう。だが、この時期の西安造像が極端に少なく、また他地域の造像研究もあまり進展していない。そのため、いかなる過程を経て西安安国寺出土造像のような様式、形式の像が出現したのか、またこのような像をどのように理解し、評価すべきかも明らかにされてこなかった。

## 2．研究の目的

本研究は、仏教美術が最高潮を迎えた盛唐時期（705～755年）に中国華北地方各地で展開した仏教美術の様相に注目し、統一様式としての「古典様式」が成立した705～712年以降の仏教美術の展開を明らかにすることを目的とする。中国仏教美術の頂点は、8世紀初頭、則天武后退位直後に出現した。だが頂点はもうひとつあり、則天武后期直後を盛唐前半とするのであれば、8世紀中頃に見られる西安安国寺造像に代表されるもうひとつの頂点を盛唐盛唐後半のピークとすることが可能である。だがこれまで、いかなる過程を経て西安安国寺出土造像のような様式、形式の像が出現したのか、またそれらが他地方の造像といかなる関係にあったかは研究されてこなかった。そこで盛唐前期における二つ目の頂点の仏教美術史上の位置づけ、その特徴を明らかにする。これより、中国仏教美術の有終の美を飾った盛唐前期後半の西安地区を中心とする仏教造像の美術史上の評価をおこなうことが可能となる。そしてこれまで漠然と盛唐様式の造像とされてきたものの正確な位置づけをし、中国華北地方における仏教美術史の完成を目指した。

## 3．研究の方法

現在西安及びその付近から出土する盛唐時期の造像数は少なく、しかも紀年銘を持つ像が僅かで、その様相は不明である。そこで盛唐後半の、西安以外の中国各地の主要な仏教石窟造像及び寺院遺跡出土造像を対象として考察を進める。具体的には、盛唐時期（705年頃～755）における敦煌莫高窟、炳靈寺石窟、天龍山石窟、雲門山石窟などこの時期の主要な仏教石窟寺院及び河北省曲陽修徳寺址など仏教寺院で展開した、仏教造像の様相を明らかにする。仏教美術が安史の乱により決定的なダメージを受ける直前の時期、他地域の造像間に類似点や共通様式、形式の存在を指摘できるか。また華北地方で人々の仏に対するイメージが盛唐前半とどのように異なり、理想の仏の姿としていかなる様式および形式の像として表現されたか。これらの問題を明らかにするため、華北地方各地の造像の様式、形式変化を分析、比較することで、その時期の首都西安仏教美術の再現を試みる。

## 4．研究成果

本研究では、敦煌莫高窟、炳靈寺石窟、天龍山石窟、雲門山石窟などの盛唐時期の石窟造像、また山西、山東、河北地方における寺院跡から出土した同時期の紀年銘像を中心に、その様相を概観した。その中で、ここではその中心である如来像を中心に報告を行う。

如来像には大きく、上半身の肉付きが良く量感があるAグループと、上半身の厚みや起伏がほとんど見られないBグループの二種類が存在する。これらに対して、則天武后期及び中宗・睿宗時期の形式を継承する像も、僅かだが見られる。それをCグループとする。Aグループはさらに3つに分類でき、A組は上半身がブロック状で、広く開いた胸元の袈裟の撓みで胸筋を表す。

敦煌莫高窟第 45 窟主尊（720 年代前半） 運城市出土阿弥陀如来坐像（726 年、図 1）、済南市県西巷の開元寺址出土如来倚坐像などがこの組に含まれる。A 組は A 組と類似し、上半身がブロック状だが、発達した胸筋が盛り上がり、その輪郭を示す皺で表される。天龍山石窟第 17 窟北壁主尊（720 年代）や曲陽修徳寺址出土開元 10 年（722 年、図 2）銘二仏並坐像などがその例である。浮き彫りだが房山雲居寺開元 10 年（722 年）銘白玉塔如来坐像もここに含める。A 組には五台县仏光寺収集の如来座像（752 年、図 3）や高平市羊頭山石窟清化寺正殿址如来倚坐像、曲陽修徳寺址出土天宝五載（746 年）銘白玉如来坐像などがあり、肥満するだけでなく筋肉の緩みを感じさせる。

一方、上半身の厚みや起伏がほとんど見られないグループが存在する。B 組は炳靈寺石窟第 4 窟如来坐像（720 年代後半、図 4）、龍門石窟第 1506 窟（糸南洞、710 年頃） 済南市県西巷の開元寺址出土如来倚坐像（714 年）などで形成される。また B 組に含まれるのは、上半身に厚みがあるものの扁平で、やはり起伏のない炳靈寺石窟第 148 窟（731 年） 青州雲門山石窟第 5 窟（731 年、図 5）の主尊などである。開元時期以前の造像形式を継承する C グループも 3 つに分かれ、C 組は肉体を袈裟に隠す、敦煌莫高窟第 79 窟主尊、房山雲居寺開元 15 年銘文白玉塔如来坐像（727 年） 曲陽修徳寺出土阿弥陀如来坐像（736 年、図 6）などが含まれる。また身体に厚みがありプロポーションがよく、肉の存在は看取されるが、その起伏がはっきり示されない像を C 組とし、天龍山石窟第 18 窟正壁如来坐像（710 年代後半～720 年代、図 7） 天龍山石窟第 9 窟如来倚坐像（720 年代後半）などが例としてあげられる。C 組は則天武后及びそれ以前の造像との関連が認められる。そして中宗・睿宗時期の造像との繋がりを指摘できる敦煌莫高窟第 46、264 窟如来坐像（720 年代前半、図 8）は、C 組である。だが、A 敦煌莫高窟第 45 窟（720 年代前半）主尊が備える結跏趺坐した両方の膝が下方を向く形式が、C 天龍山石窟第 18 窟正壁如来坐像（710 年代後半～720 年代） A 天龍山石窟第 17 窟正壁主尊（720 年代） B 炳靈寺石窟第 148 窟（731 年） C 曲陽修徳寺（736 年）出土阿弥陀如来坐像などに見られる。このことから、異なるグループでも共通する形式を備えることが理解される。720 年代後半以降、華北地方各地に特徴的な形式の像が見られるようになる。だが如来造像の肉体形式は大きく 3 種類に分けられ、それゆえこの時期華北地方各地の造像形式には、統一性がないように思われる。しかし、華北地方の東部と西部で同様の形式が、ほぼ同時期に見られることは、仏教文化の中心となる場所があり、そこから発信される情報が、各地にすぐに伝播する状況にあった可能性を示している。当然その中心となる地方は西安であり、現在各地から出土する造像の状況は、西安の多様性ととも、各地方で自らの趣向に合わせ選択受容した理想の仏の姿と考えられる。理想の仏の姿は華北地方各地で異なるが、それは全て西安の流行様式、形式であったと結論される。西安様式、形式が各地で模倣されるという形態は、盛唐前期以来、継続していたのである。そして盛唐後期を代表する西安安国寺造像は、中宗・睿宗時期の形式を継承する像の C 組の中でも 属すると考えられる。しかし、立体的で誇張した台座には、A 組からの影響も看取される。

興味深いのは敦煌莫高窟第 45 窟迦葉像の胸筋が垂れ下がり、老人特有の造形となることである。衰えた筋肉表現は、退廃趣向が存在したことを示し、筋肉の緩んだ肥満した如来像や菩薩像の出現は、これと軌を一にする。しかし第 45 窟の迦葉像は、理想ではなく現実的な人体表現を目指したものであった。そしてそれを原点として（それに退廃趣向が加わり）、ギリシャ像的な均整の取れたプロポーションを破壊する方向へと進んでいったと理解される。開元から天宝時期において、西安では理想化せず現実を直視し、またそれに誇張を加えた退廃的な表現と、その対極にある肉体の抽象化とも呼ぶべき簡略化の流れが併存していた。また則天武后からの形式も継承し、それらが華北地方各地に伝播して行った。ただし、ひとつの石窟窟内や塔内におい

て、如来像、菩薩像、弟子像、天王、力士像が必ずしも同一の肉体表現を採用するわけではなく、それぞれ異なる傾向を示す場合もある。

華北地方の多くの地区で、天王像の座が邪鬼から岩座へと変化した。だが西安蓮湖区建新村出土の天王像は、岩座上に横たわる邪鬼の上に、胸前に上げた手と同じ側の膝を曲げて立つ。敦煌莫高窟第 45 窟(720 年代前半)の天王像も同様の座に同様の姿勢を採っている。特徴的なのは、この力士像が身体に比して大きな頭部を有することある。また別の西安出土の天王像は、頭部の大きさはさほどでないが極度に肥満し、首が肩に埋もれ、踏みつける邪鬼はユーモラスな姿や表情である。炳靈寺第 10 窟(第 3 段階、756~907)では、岩座上に載るが、類似した姿の天王像が彫り出されていた。また山西省五台山では、類似するスタイルの菩薩像や力士像が見つげられる。西安仏教美術との繋がりが深い天龍山石窟で、第 17 窟において、像の均整が崩れ始めることから、720 年代前半から肉体誇張及び簡略化の動きが、西安で盛んになり始めたことを示している。そして 740 年銘を持つ四川省でも、巴中地区南龕の第 69 龕や 71 龕に、類似した天王像をはじめとする菩薩像などが彫り出された。これらのことから、西安の流行形式は、盛唐時期後半に華北地方のみならず、華南地方でも 740 年代には受容されるようになったことが知られる。今後、四川地方を中心として華南地方の摩崖造像龕群の様相を詳細に見ていくことで、西安を中心とする中国全体の仏教美術の様相を見ていくことにしたい。



図 1A



図 2A

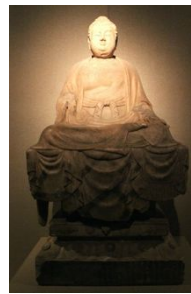


図 3A



図 4 B



図 5B



図 6 C



図 7 C



図 8 C (『敦煌莫高窟 3』文物出版社)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 八木春生	4. 巻 3
2. 論文標題 7世紀80年代至8世紀10年代中国各地仏教造像諸相	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国美術研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 八木春生	4. 巻 東アジア2（隋唐）巻
2. 論文標題 山西天龍山石窟唐前期諸窟造像の特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア仏教美術論集』中央公論美術出版	6. 最初と最後の頁 185-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 八木春生	4. 巻 23
2. 論文標題 炳靈寺石窟の唐前期諸窟龕の造像について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明大アジア史論集	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 八木春生	4. 巻 45
2. 論文標題 巴中地区佛教造像龕之研究 以初唐時期到開元初期為中心	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立台湾大学 美術史研究集刊	6. 最初と最後の頁 99-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 八木春生	4. 巻 18
2. 論文標題 初唐期における仏教造像の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国考古学	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木春生	4. 巻 1464
2. 論文標題 河北地方における唐時代前期 (618 ~ 755年) の仏教造像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国華	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木春生	4. 巻 2018-6
2. 論文標題 敦煌莫高窟唐前期第一期窟窟的特征	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 敦煌研究	6. 最初と最後の頁 1-9頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 八木春生	4. 巻 2020-2
2. 論文標題 四川広元千仏崖武周至開元時期仏教造像研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 敦煌研究	6. 最初と最後の頁 34-48頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 八木春生
2. 発表標題 關於敦煌莫高窟唐前期第1期諸窟
3. 学会等名 “敦煌唐代芸術検討会（国際学会）”
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八木春生
2. 発表標題 敦煌莫高窟唐前期第一期諸窟の特征
3. 学会等名 敦煌論壇－敦煌与東西方文化の交融国際學術検討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八木春生
2. 発表標題 從敦煌莫高窟唐前期造像看唐代諸窟編年問題
3. 学会等名 敦煌美術：形式与風格學術検討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八木春生
2. 発表標題 680至710年代中国各地佛教造像の一覽-以与西安造像の關係為中心
3. 学会等名 仏教美術源流（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 八木春生
2. 発表標題 八木春生「中宗、睿宗時期(705-712)の仏教造像の特質」
3. 学会等名 日本中国考古学会(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 八木春生	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 498
3. 書名 『中国仏教美術の展開』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	小澤 正人  (OZAWA MASAHITO)  (00257205)	成城大学・文芸学部・教授    (32630)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------